

---

命のカルテ 5

抗がん剤治療を選び  
最期まで闘った18歳女性

患者:篠田えみさん(仮名・18歳女性)

病名:脳腫瘍(神経膠芽腫<sup>こうがしゅ</sup>)

---

## 若い命が消えゆく……親子で闘った1年2か月

「あれ？ 何かおかしい」

えみさんがそう感じたのは、高校3年生の10月でした。左足に力が入らないような気がしたのです。高校生活をテニス部に捧げ、後輩や友人からも人気者でした。これからは大受験……。そんな10代の楽しい時期に、彼女の頭の中では、がん細胞が急速に増大していました。

脳のがんである悪性の脳腫瘍の中でも神経膠芽腫しんけいこうがしゅは極めて進行が速く、急速に腫瘍が増大して数週単位で症状が悪化することもあります。代表的な初発症状は頭痛で、朝に強い頭痛がみられることが多いようです。進行すると、運動麻痺、痙攣けいれん、認識力の低下などが起きてきます。

しかし、18歳という若さで、自らが病魔に侵されつつあるなどと、全く考えられなかったと思います。その時には病院を受診することはありませんでした。

11月には、なんとなく物覚えが悪くなり、友達との会話のスピードについていけないと

感じるようになりました。違和感は日に日に強まっていったため、12月半ばに地元の病院を受診しました。

そこから1か月半、入院生活を送っていましたが、病院の医師は、「脳腫瘍ではない」と断言。原因がよくわからないまま、検査などを受けていたといえます。

年が明けて1月。潜んでいた病魔が、ついにその姿を見せます。えみさんに全身痙攣の症状があらわれたのです。

ようやく緊急で開頭検査を行った結果、病院は今までの診断から一転、脳腫瘍であると診断し、えみさんの家族には「進行した状態なので手術はできない」と説明しました。

「そんな……脳腫瘍ではないといったじゃないか。話が違う！」

えみさんの両親が医師に食ってかかったのも、無理はありません。1か月放置されたということが大きな不信感となり、両親はセカンドオピニオンを希望。しかしその病院の医師からは「うちで手術できないのだから、全国どこにいつてもできない」と心ない言葉を浴びせられました。

自分たちが信用できない医師に、愛するわが子を預けるわけにはいきません。

えみさん一家は、東京にある病院へと移って治療するという選択をしました。



元気な頃はテニス部で大活躍。後輩にも慕われていた。



7月に念願叶って、家族で旅行へ。  
友達へのお土産を買ったりと  
うれしそうな様子のえみさん。

東京の病院では、えみさんの脳腫瘍が急速に増大しているのを受け、一刻の猶予もないと判断し、入院後すぐに腫瘍摘出の手術を実施しました。そしてその後は、放射線と抗がん剤による治療を開始しました。

その時には、最初の違和感から3か月がたっていました。えみさんの右半身はほぼ動かず、言葉を発することがほとんどできないため意思疎通がとれない状態まで来ていました。そのほかに、両親の判断で、えみさんは入院先とは別のクリニックで「免疫療法」という治療を受けていました。

免疫療法はその効果が未知数であり、国からも正式な医療として承認されていないため保険が適応されず、多くの場合医療費は数百万〜数千万円と高額になります。さらに私の経験からいえば、今まで100人以上、免疫療法を行ったという患者さんと接しましたが、効果が認められた人はほとんどいませんでした。

わずかな望みでも、助かる可能性があれば何でもしたい。そんな両親の願いもむなしくえみさんはいよいよ末期の診断を受けてしまいました。失望する両親に主治医は、

「確かに病気の状態は悪いです。ですが、悪い細胞を増やしていくより、これからは新しくてよい細胞をつくりましょう。笑ったり、楽しんだりすれば、よい細胞が増えます」と

励まし、私のクリニックを紹介してくれたそうです。

えみさんが笑顔でいられるように……。その言葉に押されて、私のクリニックを受診したのは、4月に入ってからでした。

しかし帰ってきたのは、決してえみさんの治療をあきらめたからではありません。両親は、「できることは何でもしてあげたい」と話していました。お母さんの「まさか自分の娘が」という気持ちや不安感がとても強く、それがお父さんにも伝播<sup>でんぱ</sup>して、動揺しているという精神状態でした。どんなことでもしてあげたいという思いから、言語療法やリハビリも強く希望しておられたのですが、当初は正直、今の段階でリハビリができるのか不安になるほどの重篤な状態でした。

東京の病院を退院して家に戻ると、えみさんは「うれしくて泣いていた」といいます。弟が学校から帰って来た際には、声こそ出ませんが口の形で「お帰り」と伝えていました。そして家に帰って1週間で、状態は落ち着き、体力が回復してきましたのです。意志の疎通もできなかつたような状態からテレビドラマの内容を理解できるようになり、ほとんど声にはならないながらも、その主題歌を口ずさみます。それまで食事はほとんどとれていなかったのが、大好きなテリヤキバーガーを1個食べられるほどになりました。高校時

代の友人もかわるがわるお見舞に来てくれたことも、えみさんにとってうれしいことでした。大好きな家に帰ってほっとしたのでしょうか、徐々に表情も豊かになり、笑顔の素敵な普通の18歳の女の子に戻ったのでした。

それを受けて、お母さんの表情も、みるみるやわらかくなっていきました。

ある日、お母さんから「免疫療法のリンパ球輸注とはどういうものなのか」と質問を受けました。私はそれに対し「免疫療法をやるくらいなら、そのお金でデイズニーランドに連れて行ってあげた方がよほどいい」とすすめましたが、お母さんの気持ちもまた、よくわかります。少しでも治る可能性が感じられるものは、すべてやってあげたい……その思いがひしひしと伝わってくることで、私もまた深く苦悩しました。

末期がんとして私のところに来た時点で、えみさんはもはや治る見込みのない状態でした。しかし、両親にとつて、わが子が18歳という若さでがんに侵されてしまったという現実を受け入れるだけでも大変な心痛を受けたはずです。その上、希望を奪うようなことをはつきりいつていいものか……。両親に会うたびに、私も心臓がぎゅっと締め付けられるような思いがしました。

5月には、抗がん剤治療を再開。私としては、治療を中止してからだいぶ元気になって

きたので内心は反対でしたが、両親の「治したい」という気持ちも痛いほどわかりました。えみさん本人も、自分の状態をわかったうえで、あきらめないことを決めたのです。

抗がん剤治療を再開して5日後には、痙攣と嘔吐が再発しました。やはり治療をすると、副作用で体調が一気に悪くなるようです。体力の低下したえみさんには治療が大きな負担になっているようでした。それでもえみさんは、1か月の治療を耐え抜いたのです。

抗がん剤治療が1段落して、再び家に帰ってきたのが6月。そこでお母さんから車椅子の購入についての相談を受けました。お母さんは「今後どんどんよくなってほしい」という観点から、寝たきりに対応するようなりクライニング機能がなく、自分で運転して自走できるものが望ましいと考えていました。一方で、私や理学療法士は、病状が進行し今後寝たきりになっていく可能性が高いため、背もたれを倒して寝たままの状態で移動できるリクライニング機能があり、落下防止のため両サイドもしっかりしたものがいいという判断をしていました。話し合っても、なかなか意見が合いません。

何度、「もうよくはならないかもしれない」と口にしようとしたことでしょう。しかしやはり私にはそれが、できませんでした。

しかし7月になると、奇跡が起こります。抗がん剤治療で弱っていたはずのえみさんは



再び元気になったのです。テレビドラマもしっかり理解し、アイドルの歌を口ずさんだりするようになりました。痙攣を起こしていた1か月前の姿からの目覚ましい変化に、私や看護師たちもとても驚きました。

手術で可能な限り腫瘍を取り除いたこと、放射線治療の効果が遅れて出てきたこと、そして本人がつまりリハビリに立ち向かいがんばったこと……。そのすべてがかみ合って、えみさんの元気のもとになったのだと思います。

そういった要因の中でも、私がつもつとも効果があったと考えているものがあります。

それは「両親の無償の愛」です。

「それはあまりに非科学的ではないか」と感じる人もいるでしょうが、人体において医学で説明されていることなど、ほんの一握りにすぎません。私は今までの経験から、病と闘う上では、一緒に支え寄り添ってくれる人がいるということがもつとも大切であると感じています。また、住み慣れた自宅で大切な家族に囲まれて生活していると、自然治癒力が引き出されることも間違いのないように思います。

えみさんのお母さんは、ずっとつきつきりで愛娘に寄り添い、一緒に笑い、一緒に泣いていました。いつ寝ているのだろうと心配になるくらい、献身的に介護やリハビリに向き

合っていました。それがえみさんの体調を回復させたもつとも大きな要因であったことは、疑いのないところです。

こうして体力が回復したことで、えみさんは念願のデイズニーランドにも出かけることができました。声は出ませんが、乗りたいアトラクション、まわる順番、すべて自分で計画。デイズニーランドで貸し出された車いすで、たくさん記念写真をとったり、お土産を買ったりと、とても楽しい時間を過ごしたそうです。

またこの頃、東京で治療を受けていて高校の卒業式に参加できなかったえみさんに対し、クラスメイトのほか、テニス部員が全員集まり、彼女のためだけに4か月遅れの卒業式をしてくれました。このエピソードから、えみさんがどれだけ学校で人気があり、素敵な高校生であったかというのが、私にも伝わってきました。この卒業式は、本人にとってかけがえのない思い出となったことでしょう。

しかし、残念ながら病気は着々と進行していました。

8月になると、痙攣が起きる回数が増え、少しずつ状態が悪くなってきました。

その後も、抗がん剤治療のために一時入院をしていたのですが、治療のたびに辛い号泣し、家に帰ってくると久しぶりに笑顔を見せる、という繰り返しでした。

体力はどんどん落ちてきている上、抗がん剤治療により、身体がかなり痩せてきていました。私は「治療をいったん中止して、体力を維持した方がいい」と説明したのですが、お母さんは「それでは治らなくなる」といわれます。頭では「もう治らない」と理解しているのですが、心がそれを受け入れられないという状態であり、これはある意味、当然のことです。

12月には、意識が朦朧もつろつろとしている時間がどんどん長くなり、宙を見つめて固まってしまったり、こちらのいうことがわからなかったりということも増えてきました。痙攣けいれんも常時起きていたような状態となり、もはや薬もほとんど効きませんでしたから、私は在宅ケアが困難となったと判断し、緊急入院となりました。すぐに病状は急速に悪化し、1年2か月の闘いの末、えみさんは帰らぬ人となりました。

病院でもえみさんの両親は、最後までえみさんを励まし続けていたそうです。

私は、患者さんが高齢者であれば、早い段階で積極的治療を中止し、緩和ケアのみで残された人生を楽しむ過ごすことをすすめています。しかし、えみさんのように若い患者さんを介護される家族に対して、はたしてどのように説明するのがいいのか、その答えは今でも出すことができません。在宅での主役は患者さん本人とその家族であり、わき役に過

ぎない医師は、一体どこまで介在すればいいのか……。

自分自身に置き換えて考えてみても、自分が末期がんであれば抗がん剤治療を受けないという選択をするかもしれないし、年離れた両親に対してなら緩和ケアのみを選択するかもしれない……。しかし、自分の妻や娘に対しては、たとえ辛い治療であっても積極的治療をしてほしいと強く望むかもしれない……。

医師の私であっても、立場や対象によって治療に対する考え方が変わってしまいます。そして、正解が人によって違うというのが、医療のもっとも難しいところですよ。

えみさんのご両親ができる限りの治療を受けてほしいという意思是、誰もが抱くであろう自然なものです。そして、家族で悩みながら出てきた治療の選択は、すべて正しかったと私は思います。

ひとつだけいえることは、がんという病気と、その治療法に対する正しい認識を持った上で、できる限り後悔のないように判断してほしいということです。

今でも、友達や先生がえみさんの家をひっきりなしに訪れています。成人式の晴れの舞台にも、親友がえみさんの遺影を抱きかかえて一緒に参加することができました。

最期まで精一杯生き抜いたえみさんは、多くの人の心に生きているのです。

# 免疫療法は本当に効くのか

がんの三大治療といえば「手術」「放射線治療」「抗がん剤」ですが、それ以外に「免疫療法」と呼ばれる治療法があります。これは、大まかにいえば血液などから体内にある免疫細胞を取り出して体外で増やし、それをまた患者さんの体内に戻すことで免疫力を底上げする、という手法です。

ただ、私がこの治療法に懐疑的であることは前述の通りです。

ある患者さんは、東京に免疫療法に行き、3か月間で1500万円もの費用を払いました。そのクリニックの医師からは「がんがだいぶよくなりましたよ」と説明を受け

ていたといえます。しかしその直後の検査で、明らかに病状が進行し、末期の状態であることが判明。数週間で亡くなられました。

また、ある患者さんは自宅での緩和ケアと並行してクリニックに通い、免疫療法を行っていました。やはり効果があらわれず、もはや明日までもつかどうか、という状態になりました。その際免疫療法を行っていたクリニックから私に対して電話がかかってきたので、病状を説明すると「通えなくなつたのであれば、血液を培養するの採血して送ってください」といいます。

ちなみにそのクリニックでは、家族にも、同じような電話をかけていました。

私が「免疫療法は全く効いていませんし、そもそも今日明日にも亡くなるような状態なのに採血などでできません」と答えると「免疫療法をしているからそんな状態ですんでいるんですよ。もし今、治療を止めて亡くなっても責任は持ちません」と、とても医師とは思えないような非常識な返答がありました。

これらは残念ながら、明らかに詐欺です。なぜなら、医師たちはその患者さんに効果がないことがわかっていながら、免疫療法を続けているからです。前者は「治ってきている」と嘘をつき、後者は今にも亡くな

る患者さんに対して「効果がある」と全く根拠のない出まかせを述べました。がんにおびえ、わらにもすがるような思いでいる患者さんに対しこのような詐欺を働く……同じ医師として、強い憤りを感じます。

すべての免疫療法がこのような詐欺的なものであるかはわかりませんが、また科学的に効果があると証明されていない治療法であるのは事実です。だから国からも認可されず、保険がおりないのです。このような未知数な治療というのは、医師の「言い値」で値段がつけられますから、高額であればあるほど「金儲け」の要素が多分にあると感じます。

もしあなたに、お金が潤沢にあって、患

者さんも何かにすがりたいという気持ちが強  
強く、免疫療法をすることで精神が安定し  
て前向きに生きられるのであれば、反対は  
しません。しかし個人的には、すすめるこ  
とは絶対ありません。

# 抗がん剤は「もろ刃の剣」

がんの主な治療法のひとつとなっているのが抗がん剤ですが、それががんが治ることはほとんどありません。

確かに、放射線療法や手術では治療しにくい血液系のがんなどに対しては、抗がん剤が有効に作用することもあります。しかしそれは、あくまで少数でしかありません。抗がん剤というのは、「元気な細胞をも殺す」薬です。

がん細胞だけをピンポイントに攻撃して殺すならともかく、体中のさまざま細胞まで破壊してしまい、それによって強い副作用があらわれるものが多くあります。

代表的な副作用は、気持ちが悪くなったり嘔吐したり、倦怠感が強くなったりということが挙げられます。これらは患者さんにとって、もつとも辛い症状です。

体内に起きることとしては、まず血液細胞が抗がん剤に攻撃されることで、白血球が減り、抵抗力が落ちて、抗がん剤をうって1〜2週間で感染症にかかりやすくなります。赤血球も攻撃されて減ることで貧血が起き、血小板が減ることで血が止まらなくなりやすくなります。

皮膚や粘膜も攻撃の対象となるため、皮膚の色はどす黒くなり、粘膜のダメージか



ら胃腸炎や口内炎になることがよくあります。口の中の粘膜をやられることで、味覚が悪くなる人も多く「何を食べてもゴムを食べているよう」「食事がすべて極端に甘く感じる」などといった味覚障害が起きてきます。その結果、食事が食べられず嘔吐してしまうようになれば、食欲も体重も減り、さらに体力がなくなってしまうという悪循環に陥ります。

髪の毛の細胞が攻撃されれば、脱毛してしまいます。特に女性にとっては、脱毛は精神的にも辛いことです。

このようなリスクを背負う覚悟を決め、思い切って抗がん剤を用いても、効果が上がる人と上がらない人がいます。効果が出

るのは1〜2割。誰に効くかということは、医師にも誰にもわかりません。いわば「宝くじ」にあたると大きく回復することもありますが、あたらなければ全く効果はなく、ただ毒を体に入れているようなものです。

さらに、がん細胞は抗がん剤に対し次第に耐性ができてくるため、最初は「がんを5発殴って、その他の身体の細胞を1発殴る」ような、それなりに効果がありつつ副作用も大きくないという状況であっても、続けるほど効果が減り、最後は「がんを1発殴って、身体を5発殴る」というようにダメージだけが大きくなっていきます。

こうして抗がん剤を続けることでの、もっとも大きな問題は、患者さんの体力や免疫

力が奪われてしまうということです。

私の患者さんの多くは、緩和ケアを行うことでがんの進行が止まったり、症状が改善したりします。これは体の免疫機構が機能することによる自然治癒力のおかげです。

しかし抗がん剤で体がぼろぼろになった状態だと、免疫力も底をついているため、緩和ケアでの回復も難しくなります。

病院での治療は慈善事業ではありませんから、利益率の高い商品である抗がん剤をすすめてくる医師も多くいます。抗がん剤をやらない選択をしたら、急に態度が冷たくなった、というようなモラルのない医師がいるという話も、残念ながらたびたび耳にします。

よく、「抗がん剤を止めたら死ぬ」と思

い込んでいる患者さんや家族がいますが、そんなことはありません。むしろ、抗がん剤治療の苦痛やストレスから解放され、楽しむことでナチュラル・キラー細胞が増え、免疫力が上がってがんと闘うことができま

す。回復が難しいなら、病院の医師のいうがままに最後まで抗がん剤をうち続けるようなことはせず、どこかで緩和ケアに移行する勇気を持たなければいけません。

人生を楽しむほど、寿命が延びる。私はそう考えており、それが真実であることは、余命宣告を超えてはるかに生きた、私の患者さんたちが証明してくれています。